

英語：語源散策－英語を取り巻く外国語たち－

Part I ゲルマン語の一方言から国際語への道のり

1) 英語使用人口 (David Crystal 講演 “The Future of Englishes” (2009) によると、推計 15～20 億人)

第 1 言語として：約 4 億人 (e.g. USA, UK, Canada, Australia, NZ, South Africa)

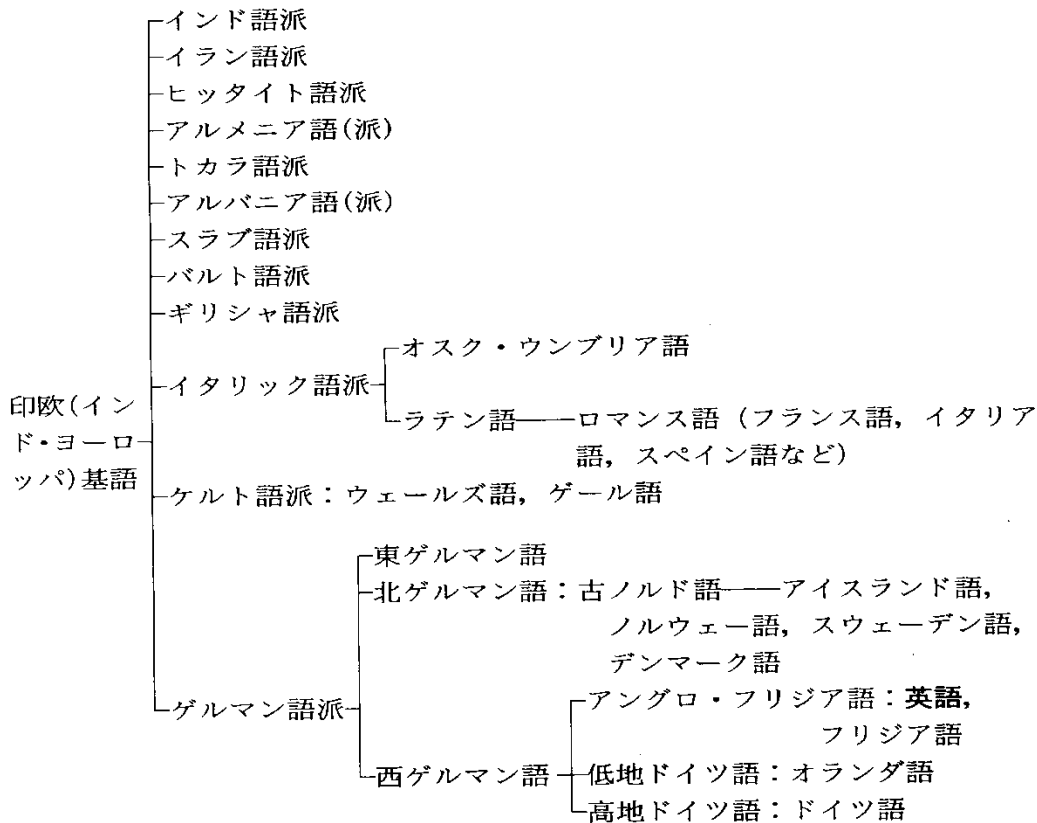
第 2 言語として：約 5 億人 (以上) (e.g. India, Singapore, Hong Kong, Philippines)

外国語として：約 6 億人 (以上)

2) 英語史の時代区分 (約 1500 年の歴史)

古英語 (Old English)	450-1100	純ゲルマン語
中英語 (Middle English)	1100-1500	フランス語からの影響 (特に語彙面)
近代英語 (Modern English)	1500-1900	イギリスの海外進出
現代英語 (Present-day English)	1900-	アメリカの世界的発展

3) 印欧語の中の英語の系統



4) 英語のルーツ： アングロ・サクソン人はどこから来たか？

- ・ブリテン島にはケルト人が移住していた。
 - ・Julius Caesar の英国侵入 (B.C. 55-54)。後にローマ帝国の支配下へ (紀元 1 世紀～ 5 世紀初)
 - ・アングル族、サクソン族、ジュート族 (Angles, Saxons, Jutes) の英国侵入 (A.D. 449-547)
- Cf. 「イングランド」の語源：England < 古英語 Engla land ('Angles' Land)

5) 「フランス語人」(French-speaking people) による英国征服

Norman Conquest (1066) Cf. Norman < 'North-man'

フランス語を話す支配階級、英語を話す被支配階級という二層の構造

アングロサクソン系	(動物)	ox, cow	sheep	swine, (pig)
フランス系	(肉)	beef	mutton	pork

14 世紀の半ば頃から再び英語が盛り返す (法廷・議会の公用語、学校での教授用語)

Cf. 「英詩の父」と呼ばれる Geoffrey Chaucer (c. 1343-1400)

The Canterbury Tales (『カンタベリー物語』)

Part II 英語の語彙の特徴

コスモポリタンの性格、柔軟性

(ゲルマン系語彙+ラテン系語彙；世界の様々な言語からの積極的借用)

語彙の特徴 その 1：ゲルマン系語彙+ラテン系語彙

Cf. 日本語の「やまと言葉」と「漢語」

<ゲルマン系>	<ラテン系>
尋ねる ask	尋問する interrogate
始める begin	開始する commence
買う buy	購入する ()
深い deep	深遠な ()
与える give	贈呈する ()
得る ()	獲得する acquire

<ゲルマン系の名詞>	<ラテン系の形容詞>
hand	manual <Cf. L. manus 手>
house	domestic <Cf. L. domus 家>
sea	() <Cf. mare 海>
sun	() <Cf. sōl 太陽>

参考

グリムの法則 (Grimm's Law) (Cf. グリム兄弟の兄 Jacob Grimm にちなむ)

印欧祖語からゲルマン語への子音の対応規則

bh→b→p→f	例	ラテン語	pater	英語	father	(cf. paternal)
dh→d→t→θ		ラテン語	tres	英語	three	(cf. trio, triple)
gh→g→k→h		ラテン語	canis	英語	hound	(cf. canine 「犬歯」)

英語の語彙の中に見られる対応例

pedestrian	foot	(Cf. ラテン語 pes 「足」)
dental	tooth	(Cf. ラテン語 dens 「歯」)
agriculture	acre	(cf. ラテン語 ager 「畑」)

語彙の特徴 その2：世界の様々な言語からの借用語

(1) 本来語と外来語の比率 (『研究社 新英和大辞典(第6版)』 p. xix より引用)

(*使用頻度に基づいて選んだ語彙約2万語と約14万語の場合)

	(2万語)	(14万語)
本来語	19%	14%
ラテン語	15%	36%
フランス語	36%	21%
ギリシャ語	13%	4.5%
北欧語	7%	2%
イタリア語・スペイン語	1%	3%
その他	9%	19.5%

(*北欧語の項にはオランダ語・ドイツ語を含む)

「本来語の比率はそれぞれ19%、14%で、語数を大きくとれば本来語の比率は低くなる傾向がある(1千語では83%、1万語では25%)。これに対して、ラテン語・フランス語の占める比率は甚だ大きく、語彙数の大きさに比例して大きくなることが知られている。このように、英語はゲルマン語派に属する言語でありながら、語彙に関してはむしろラテン語・フランス語系のロマンス語的色彩が極めて濃い。」

(上掲書 p. xix より引用)

参考文献

(英語史の啓蒙書) 寺澤 盾『英語の歴史—過去から未来への物語』(中公新書、2008年)

(2) 借用語の例～世界の様々な言語から～

Some sources of Modern English words

Afrikaans: trek, apartheid	Italian: sonnet, traffic, bandit,
American Indian languages: moccasin, wigwam, squaw	opera, balcony, soprano, lava,
Anglo-Saxon: God, house, rain, sea, beer, sheep, gospel, rainbow, Sunday, crafty, wisdom, understand	arcade, studio, scampi, timpani, ballot
Arabic: sultan, sheikh, hashish, harem, ghoul, algebra	Japanese: kimono, tycoon, judo
Australian languages: dingo, boomerang, budgerigar, wombat	Latin: diocese, index, orbit, equator, compact, discuss, genius, circus, aquarium, alibi, ultimatum, focus
Chinese: ketchup, sampan, chow mein, kaolin, typhoon, yen (= desire)	Malagasy: raffia
Czech: robot	Malay: sarong, amok, gong
Dutch: frolic, cruise, slim	Nahuatl: tomato
Eskimo: kayak, igloo, anorak	Norwegian: ski, fjord, cosy
Finnish: sauna	Old Norse: both, egg, knife, low, sky, take, they, want
French: aunt, debt, fruit, table, challenge, venison, medicine, justice, victory, sacrifice, prince, dinner, grotesque, garage, moustache, unique, brochure, police, montage, voyeur, castle	Persian: sofa, shah, caravan, divan, bazaar, shawl
Gaelic: brogue, leprechaun, banshee, galore	Portuguese: flamingo, buffalo, pagoda, veranda, marmalade
German: waltz, hamster, zinc, plunder, poodle, paraffin, yodel, angst, strafe, snorkel	Quechuan: llama
Greek: crisis, topic, stigma, coma, dogma, neurosis, pylon, therm, euphoria, schizophrenia	Russian: czar, steppe, sputnik, intelligentsia, rouble
Hawaiian: ukulele, hula	Sanskrit: yoga, swastika
Hebrew: shibboleth, kosher, kibbutz	Spanish: sherry, cannibal, banana, potato, cigar, rodeo, stampede, canyon, cafeteria, supremo, marijuana, junta
Hindi: guru, pundit, sari, thug	Swahili: safari, bwana
Hungarian: goulash, paprika	Swedish: ombudsman
	Tahitian: tattoo
	Tamil: catamaran
	Tibetan: sherpa, yeti, yak
	Tongan: taboo
	Turkish: yoghurt, kiosk, fez, caftan, bosh, caviare
	Welsh: crag, coracle, corgi
	Yiddish: schemozzle, schmaltz

(David Crystal, *The English Language* (2002), p. 40 より引用)

☆日本語から入った語の中には意外な形 (e.g. rickshaw)、意外な意味 (e.g. satsuma)、意外な用法 (e.g. skosh) もあり、眺めていると楽しいものです。外から日本語を見るための資料になるかもしれません。

語源アラカルト

I. 「エプロン」と「ナプキン」は親戚！？

☆異分析 (metanalysis) ☆

a napron > an **apron**

Cf. napkin ← 古フランス語 nappe 「テーブルクロス」 + ·kin ゲルマン系指小辞

a noumpere > an **umpire** 「アンパイア, 審判員」

a nadder > an **adder** 「(北米産の)ハナダカヘビ《無毒》; (ヨーロッパ・北アジア産の)クサリヘビ《有毒》」

an ekename > a **nickname** *eke 「また、さらに、そのうえ」
(またの名)

人名の愛称 Ned, Noll の由来:

mine Ed(ward) > my **Ned**

mine Ol(iver) > my **Noll**

II. 「さざんか」を「山茶花」と書くのはなぜ？

『スーパー大辞林 3.0』より引用

さざんか 【山▽茶▽花】

〔字音「さんさか」の転か。「山茶」はツバキの漢名〕

ツバキ科の常緑小高木。暖地の山中に自生し、また庭木として栽植される。葉はツバキにくらべてやや小形で密につく。晩秋から冬にかけ、五弁花をつける。花は平開し、花弁は離生、ツバキと異なりばらばらに散る。果実は果(さくか)で、種子から油をとり、頭髮用・食用にする。園芸品種が多い。〔季〕冬。(下線は浦田)

☆音位転換 (metathesis) ☆

古英語 bridd > 中英語 bird

古英語 þrida > 中英語 third

古英語 hros > 中英語 hors (> 近代英語 horse)

古英語 wæps > 中英語 wæsp (> 近代英語 wasp) 「スズメバチ」

中英語 clapsen > 近代英語 clasp 「(留め金で)留める; 握りしめる」

III. 「シャツ」と「スカート」はどういう関係？

Concise Oxford English Dictionary 12th ed. より引用

shirt

ORIGIN Old English *scyrte*, of Germanic origin; related to **skirt** and **short**; probably from a base meaning 'short garment'. (下線は浦田)

Concise Oxford English Dictionary 12th ed. より引用

skirt

ORIGIN Middle English: from Old Norse *skyrta* 'shirt'; cf. synonymous Old English *scyrte*, also **short**.. (下線は浦田)

***shirt** (シャツ) と **skirt** (スカート) は語源的には兄弟で、ともに **short** (短い) と関係がある。

☆二重語 (doublet)☆

究極的な語源は同じであるが、時代と経由によって異なる語形となっている単語同士。

shirt (< 古英語) — **skirt** (< 古ノルド語)

chief (< 古フランス語; 1300年頃に借用) — **chef** (< 近代フランス語; 19世紀に借用)

IV. 「貴様」という言葉の印象は？

『スーパー大辞林 3.0』より引用

きさま 【貴様】

(代) 二人称。

- ① 男性がきわめて親しい同輩か目下の者に対して用いる語。また、相手をののしっている時にも用いる。おまえ。「-とおれとの仲ではないか」「-それでも人間か」
- ② 目上の者に対して、尊敬の意を含めて用いる。「-は留守でも判は親仁の判／浄瑠璃・女殺油地獄 下」「(髪ナドヲ)-ゆゑに切る／浮世草子・好色一代男 4」〔中世末から近世初期へかけて、武家の書簡などで二人称の代名詞として用いられた。その後、一般語として男女ともに用いるようになったが、近世後期には待遇価値が下落し、その用法も現代とほぼ同じようになった〕 (下線は浦田)

◆意味の変化◆

(1) 「一般化」 (generalization)

bird 「ひな鳥」 → 「(一般に) 鳥」

holiday (< holy day) 「聖日」 → 「休日」

(2) 「特殊化」 (specialization)

fowl 「(一般に) 鳥」 → 「家禽 (かきん)」

meat 「食物」 → 「肉」

deer 「動物」 → 「鹿」

hound 「犬」 → 「猟犬」

(3) 「良化」 (amelioration)

knight 「少年, 若者; 召使い」 → 「騎士」 → 「(近世英国の) ナイト爵、勲爵士」

nice 「愚かな」 → («趣味の凝った, やかましい») → 「微妙な, 細かい; 精妙な」

→ 「結構な, すてきな」

Cf. ラテン語 nescius 「無知な」 < ne 'not' + scire 'to know'.

(Cf. science 原義「知識」)

(4) 「悪化」 (deterioration; pejoration)

knave 「少年; (若い) 下男」 → 「悪党, ならず者」

silly 「幸福な; 祝福された」 → 「愚かな」 Cf. 日本語の「おめでたい」

参考文献

寺澤芳雄 (編) 『英語語源辞典』 (研究社、1997年)

下宮忠雄ほか (編) 『スタンダード英語語源辞典』 (大修館書店、1989年)

下宮忠雄 (編著) 『ドイツ語語源小辞典』 (同学社、1992年)

寺澤芳雄 『ことばの苑—英語の語源をたずねて』 (研究社、2004年)